

大学院への招待

大学院で学びたい諸君へ

松 嶋 明 男

Pour les candidats aux concours des cours de maîtrise

Akio Matsushima

大学院時代について尋ねられたとき、何を思い出すことになるだろう。そう考えたとき、まず頭に浮かんだのが、大ぶりのマグカップの中で冷めていくコーヒーのことだった。

あの頃。同じ東大の大学院生でも、理科系と人文系では待遇がかなり違っていた。それが西洋史研究室の仲間の中で、いつも冗談の種になっていた。大体、あちらさんときたら、4億円の元素分析機を一人占めにしていて、性能に満足できなくなったから、3,000万円のグラフィック・ボードを2枚買ってもらった。などという景気のいい話が、日常会話にぼんぼん出てくる。西洋史の院生なんか、自分用の机すらないというのに。それも仕方ない話で、歴史家は、自分が使う史料のコピーの束さえあれば、好きなところで仕事ができる。だから、キャンパスでは、院生同士の情報交換というか、若手研究者同士の切磋琢磨というか、いつも、マグカップにコーヒーを注ぎ、学生談話室の「院生サイド」に腰を据えて、とめどない話を続けていた。話題は、西洋史のときもあれば、モバイル・コンピューティングのときもあった。そして、いつのまにか夕陽はビルの谷間に姿を消し、飲みそこねたコーヒーは冷めてしまっていた。カップを洗い、仲間に別れを告げると、再び一人き

りで、史料に書き残された文字を頼りに、失われた過去を蘇らせる作業へと戻ることになる。

大学院とは何か。その意味が変わる瞬間を大学院で迎えたのは、ちょうど博士課程に進学した年の4月だった。その時のガイダンスで、主任教授が語った言葉は、白鷗大学新聞に柳川先生が書かれていたのと同じ、「放牧型育成」の時代は終わったという宣言だった。修士課程は、もはや研究者養成に特化した教育機関ではない、と。ただ、白鷗とは違って、それは農耕から狩猟採集への後退のようなものだった。それから、修士課程を終えた学友の中に、博士課程に進学せずに就職していく者が現れるようになった。文教系の官僚、高校の教員、学術出版社の編集者。彼らが就いたのは、どれも大学院で身につけた高度の専門性が求められる職場ばかり。大学院進学は、佐藤知恭先生が重要性を強調なさっているキャリア・デベロップメントの一つだが、専門性が高まった分だけ、大学院修了者の職業の選択肢は狭まる。当たり前の話だが、四大卒でこなせる職種に、わざわざ院卒を採用する必要はないからだ。

大学院で何を学び、何を身につけ、どういう就職をするのか。大学院に進学する者は、人生を戦略的に生きることが必要となる。そのつもりで努力を怠らなければ、結果は残る。それが、大学院の与えてくれる最大の喜びでもある。そうである以上。ただなんとなく、とか。就職浪人はできないから、とか。そういう勉強する気の無い人間が進学したところで、失うものの方が多いだろう。進学する諸君は、みんな、がんばって勉強してほしい。

(本学経営学部専任講師)